

SHOW HEYシネマルーム

★★★★

発禁本 SADE

配給/コムストック

2003 (平成15) 年5月13日鑑賞

<東宝東和試写室>

Data

監督: ブノワ・ジャコ

出演: ダニエル・オートウイユ/マ

リアヌヌ・ドニクール/イジ

ルド・ル・ベスコ

👁️👁️ みどころ

何とも刺激的なフランス映画によるサド文学の本格的な映画だ。原作は1994年、セルジュ・ブラムリー作の『寝室の恐怖』とのこと。1789年のフランス革命の直後、ロベスピエールによる「恐怖政治」の時代、同じ監獄ながら地上の楽園のようなサナトリウムに移送されたマルキ・ド・サドは16歳の貴族の少女と知り合った。この少女もいつ処断されるかわからない身。サドの発禁本を読み、「性の悦び」を知りたいと切望する少女に対して、サドは逞しい身体をもつ庭師を……。そして自らも……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<フランス語による正真正銘のサド映画>

マルキ・ド・サド侯爵の「書くこと」への執念を描いた刺激的な映画『クイルズ』(2001年)は、ハリウッド映画だったが、この原作名『SADE』(邦訳:『発禁本 サド』)は、フランス映画であり、フランス語によるサド文学の映画化(2000年作品)だ。

原作は1994年にグラッセ社から出版されたセルジュ・ブラムリー作の“La Terreur dans le boudoir (寝室の恐怖)”であり、この原作が取りあげているのは「サドの生涯において、ほとんど何の情報もない、謎に包まれた、1791年に彼がサン・ラザールの刑務所からピクピュスに移送された時代」とのこと。そして本作は「そのサドの暗黒の時代を、事実に基づきながら脚色した、禁断の世界」とのことだ。

私にはフランス語はさっぱりわからないが、フランス独特のイントネーションだけはよくわかる。そしてサド映画と『エマニエル夫人』はフランス語でなくちゃ……と変なこだわりを満たしてくれる映画。

<サド侯爵とフランス革命>

サド文学やサド映画というと変に誤解されそうだが、この映画は1789年のフランス革命から5年後の1794年のロベスピエールによる「恐怖政治」体制下、サナトリウムのような「ピクピュス」の監獄に収容されたサド侯爵を描いたものだ。

サド侯爵はフランス革命の時代に生きた人物だが、ナポレオンからも、ロベスピエールからもその他すべて権力者から迫害された。それは彼が放蕩三昧の無神論者であり、「不道德の極み」で「社会に無用」な存在と見なされたからだ。サドは一生涯の3分の1を監獄で過ごしたが、その獄中でも精力的な執筆活動を続け、あらゆる手段を使って社会に発信し続けた、類まれなベストセラー作家だ。

しかし、一大ベストセラーとなったサドの『ジュスティーン』は、社会に害悪をもたらす作品として『発禁本』とされたうえ、今やサドはロベスピエールから処刑者リストにあげられる状況となっていた。



<監獄にもいろいろ>

サドは、バステューユ、サン・ラザールなどの監獄を渡り歩いて、今は54歳になり、サドの愛人サンシーブル（マリアヌ・ドニクール）の力によって、僧院を監獄につくり直した「地上の楽園」のような「ピクピュス」のサナトリウムに移送された。サンシーブルは、サドの最後の愛人で、サドのことをよく理解していた。そして時の権力者ロベスピエールによるサドの迫害を阻止するため、ロベスピエールの側近の1人であるフルニエ（国民公会議員）の愛人となってさまざまな手を打ってくれたのだ。

そこに同行するのは貴族とその妻、そして16歳になる美しい娘エミリー（イジルド・ル・ベスコ）。サドが危険人物であることを知る貴族は、エミリーに対してサドと口をきくことを禁じた。しかしエミリーは幽閉されたサナトリウムの中でサドが語る、自由に生きることへの興味や、サドが執筆する小説についてこれがある面では拒否しながらも、自ら

の性的欲望を抑えることができなかつた。

そこで、サドは・・・。

<刺激的なサド文学における禁断の世界>

パンフレットには、「マルキ・ド・サドによる、壮絶な処女喪失とは一。」「いけない、彼を見つめては。それを読んで。犯されていく・・・。」「逞しい体だけしか持ち合わせない小作人と貴族の処女の性の雄たけび。」とあり、これだけを読めば、ポルノ映画そのものだ。

そして、貴族の処女と、肉体だけの（逞しい）小作人の不釣り合いなセックスは、永遠のテーマ。

『エマニエル夫人』も同じようなテーマであり、これはフランス文学特有の領域のようだ。貴族の少女、16歳のエミリーに手ほどきを求められたサドは当時54歳。その処女解禁の時、自らはその行為をせず、逞しい庭師に少女を犯させ、自らの背中に鞭を打たせた。このようにサディズムとマゾヒズムとの間のアヤは微妙だ。

フランス語によるサド映画は、この刺激的な場面を實に見事に描いている。映画の中のサドとちょうど同じ年齢（54歳）になっているスケベオヤジの私としては大感激……。もっともここではこの場面をこれ以上詳しく描写することはできないが・・・。

<マイナーな上映は残念>

この映画は大阪では6月14日から千日会館のみで上演される予定であり、メジャーな映画館では公開されない。たしかに多少マニアックな映画だが、私はサド文学、サド映画はフランス革命に関わる歴史的事実としてきちんと勉強する必要があると思っているうえ、サドが描く人間の性的欲望、性的本能については真面目に考えるべきテーマだと考えている。したがって、こういう映画はもっと広く公開されて多くの人達に観てもらいたいと思う。

主役のダニエル・オートウイユの演技は素晴らしいし、マリアンヌ・ドニクールもいい感じ。そして16歳の少女イジルド・ル・ベスコは、私の目からは決して美人には見えないうえ、難しい役を見事に演じている。

2003（平成15）年5月14日記